
令和3年度 第1回午後

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和3年2月1日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図^{あいず}があるまで、この冊子^{きつし}の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外^{ほか}のものを置いてはいけません。受験生^{くわんしん}どうしの貸し借り^{かかか}もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子^{きつし}の印刷^{いんさつ}が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子^{きつし}のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は21ページまであります。
8. 問題冊子^{きつし}は持ち帰ってください。

一

次の――線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにそれぞれ直して書きなさい。

- ① 「必ず優勝するぞ」とイキマク。
- ② 彼はシジュウスマホの画面かを見ている。
- ③ 自動車のモケイを組み立てた。
- ④ 常にココロザシは高く持とう。
- ⑤ 母と父の表情はタイシヨウ的だった。
- ⑥ 道に迷ってウオウサオウしてしまった。
- ⑦ 伝達された集合時間をフクシヨウした。
- ⑧ 独りで生きていくにはつらい世の中だ。
- ⑨ 祖母には達者に暮らしてほしい。
- ⑩ 足りない物をその都度注文する。

二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「雑草は踏まれても」

こんな言葉をよく聞きます。「雑草は踏まれても」
この空欄には、どんな言葉が入るでしょう。

もしかすると、あなたは、「立ち上がる」という言葉を思いついたかもしれません。

① 「踏まれても踏まれても立ち上がる」それが、雑草のイメージですよ。

しかし、それは間違いです。

じつは、雑草は踏まれると立ち上がらないのです。「雑草は踏まれても立ち上がらない」これが、本当の雑草魂です。

確かに一度踏んだくらいなら、立ち上がってくるかもしれません。しかし、何度も踏まれると雑草は立ち上がることはないので。

何だか、情けないと思うかもしれませんが。「せっかく雑草のように頑張ろうと思っていたのに」とがっかりしてしまった人もいるかもしれません。

しかし、そうではありません。

じつは、踏まれたら立ち上がらないことこそが、雑草のすごいところなのです。

② 雑草は踏まれたら、立ち上がりません。どうして、立ち上がるうとしないのでしょうか。

考え方を少し変えてみることにしましょう。

そもそも、どうして踏まれたら立ち上がらなければならないのでしょうか？

植物にとって、もつとも大切なことは何でしょうか？
それは花を咲かせて、種を残すことです。

そうだとすれば、踏まれても踏まれても立ち上がろうとするのは、かなり無駄なエネルギーを使っていることになります。そんな余計なことにエネルギーを割くよりも、踏まれながらも花を咲かせることのほうが大切です。踏まれながらも種を残すことにエネルギーを注がなければなりません。

だから雑草は、踏まれても踏まれても立ち上がるような無駄なこととはしないのです。踏まれる場所で生きていく上で、一番大切なことは、立ち上がることはありません。

踏まれたら立ち上がらなければならぬというのは、人間の勝手な思い込みなのです。もちろん、踏まれっぱなしという訳ではありません。

踏まれて、上に伸びることができなくても、雑草は決してあきらめることはありません。横に伸びたり、茎を短くしたり、地面の下の根を伸ばしたり、なんとかして花を咲かせようとします。もはや、③立ち上がることなどどうでも良いかのようにです。

雑草は花を咲かせて、種を残すという大切なことを忘れはしません。大切なことをあきらめることもありません。だからこそ、どんなに踏まれても、必ず花を咲かせて、種を残すのです。

「踏まれても踏まれても大切なことを見失わない」これこそが、本当の雑草魂なのです。

植物の成長を測る方法に ④ 「草高」と「草丈」があります。

この二つの言葉は、よく似ていますが、意味するところは違います。

草高は「根元からの植物の高さ」を言います。一方、草丈は「根元からの植物の長さ」を言います。何だ、同じじゃないかと思うかもしれませんが、そうではありません。

確かに上に伸びる植物にとっては、草高と草丈は同じです。しかし、踏まれながら横に伸びている雑草はどうでしょうか。横に伸びてゆくの、草丈は大きくなっても、上に伸びることはないのです。草高はゼロのままです。

アサガオが二階まで伸びましたと喜んでみたり、もうこんなに伸びたからそろそろ草を刈るかと言ってみたり、^⑤人間は、植物の成長を「高さ」で測りたがりです。それが一番、簡単な方法だからです。

しかし、まっすぐ上に伸びることだけが成長ではありません。

身の回りの雑草を見てみてください。

みんな曲がったり、傾いたりしながら成長しています。まっすぐに伸びている雑草は一つもないのです。

横に伸びたり、斜めに伸びたり、何度も曲がったり、雑草の伸び方はそれぞれです。そんな複雑な成長を測ることは大変です。そのため人間は、植物を「高さ」で評価します。人間の持っているものさしは、まっすぐなものさしです。そのため、まっすぐな高さで測ることしかできないのです。

「高さで評価される」ということは、皆さんにとっては成績や偏差値という言葉が当てはまるかもしれません。「高さ」という尺度は大切な尺度です。「高さ」で測ることはダメなことではありません。成績は悪いより良いほうがいいに決まっていますし、成績が良い人はほめられるべきです。

しかし、それだけのことです。それはたった一本のものさしで測ったたった一つの尺度に過ぎません。大切なことは、高さで測れることは、成長を測るたった一つの尺度でしかないということ。雑草の成長がそうであるように、「何が大切か？」を考えれば、「高さ」がすべてではありません。

まっすぐなものさしで、すべての成長を測ることはできません。そしておそらく、本当に大切なことは、ものさしでは測ることのできないものなのです。

人々が行き交う歩道の隙間に、雑草が生えているのを見かけます。

あるものは茎を横に伸ばしていたり、あるものは大きくなることなく、身を縮ませています。そんな雑草を見て、何だか

かわいそうと思ってしまうかもしれません。地べたで暮らす雑草たちを惨めに思ってしまうかもしれません。しかし、本当にそうでしょうか。

確かに他の植物たちが、天に向かって高々と伸びようとしているのと比べると、踏まれている雑草は成長していないように見えます。他の植物が高く高くと縦に伸びているのに、^⑥踏まれる場所の雑草は本当に縦に伸びることをあきらめてしまつて良いのでしょうか。

植物が上に向かって伸びようとするのには、理由があります。

先にも説明しましたが、植物が成長をするためには、光を浴びて光合成をしなければなりません。光を浴びるためには、他の植物よりも高い位置に葉をつけなければなりません。もし、他の植物よりも低ければ、他の植物の陰で光合成をしなければならなくなります。有利に光合成をするためには、他の植物よりも少しも高く伸びなければならぬのです。

光を求める植物たちにとって、自分がどれだけ伸びたのかという^⑦高さは、じつは重要ではありません。光を浴びるために大切なのは、他の植物よりも、少しでも高く伸びるといふ^⑧高さです。そして、他の植物よりも少しでも上に葉を広げようと上へ上へと伸びるのです。

植物たちはこうして激しい競争を繰り広げています。

踏まれる場所の雑草は、本当にこの競争に参加しなくても大丈夫なのでしようか。
もちろん、大丈夫です。

よく踏まれる場所には、上へ上へと伸びようとする植物は生えることができません。上へ伸びても踏まれて折れてしまうからです。

そのため、草高がゼロの横に伸びる雑草も、小さな小さな雑草も、広げた葉っぱいっぱい太陽の光を存分に浴びています。こんなに光を独占している植物は、他の場所ではなかなか見られません。

(稲垣栄洋『はづれ者が進化をつくる』より)

問1 ー 線部①「踏ふまれても踏まれても立ち上がる」とありますが、これを次の文のように言いかえました。「立ち上がる」以外で文中の空らんにあてはまる五字の語句を、本文中からぬき出して答えなさい。(ただし、句読点などの記号も字数にふくみまず。)

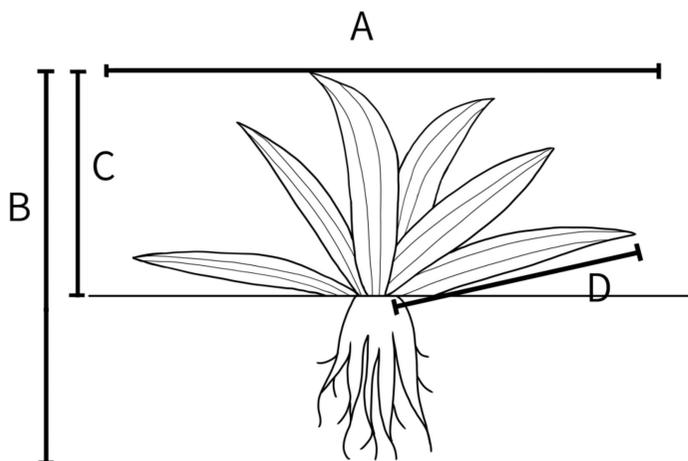
踏まれても踏まれてももう一度 。

問2 ー 線部②「雑草は踏まれたら、立ち上がりません。どうして、立ち上がろうとしないのでしょうか」とありますが、踏まれた雑草が立ち上がろうとしないのはなぜですか。四十字以上六十字以内で説明しなさい。(ただし、句読点などの記号も字数にふくみまず。)

問3 空らん に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. やみくもに イ. やぶからぼうに ウ. あてずっぽうに エ. いいかげんに

問 4 ー 線部④ 『草高』と『草丈』とありますが、「草高」を次の図中の A ～ D のなかから一つ選び、記号で答えなさい。



問5 — 線部⑤ 「人間は、植物の成長を『高さ』で測りたがります」とありますが、筆者がこのように述べるのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・植物の成長には光合成が欠かせなく、どれだけ光合成できるかは背の高さに比例するので、植物の成長は高さで測るのがもっともわかりやすいから。

イ・人間は自らの成長を評価するときに複雑な基準を用いるが、複雑な成長をする植物では高さという単純な基準でしかその成長を評価することができないから。

ウ・人間の持っているものさしはまっすぐなものなので、植物の成長もまっすぐな高さで測ることが簡単かつ唯一の方法だから。

エ・植物にとってもっとも大切なことは種を残すことであり、その力が強い植物ほど背が高いので、植物としての優劣は高さで決める方が適切だから。

問6 — 線部⑥ 「踏まれる場所の雑草は本当に縦に伸びることをあきらめてしまっていて良いのでしょうか」とあります。次の文はこの問いかけに対する筆者の考えをまとめたものです。文中の空らんを三十字以内で補い、（ ）内は解答らんの「あきらめてよい」もしくは「あきらめてはいけない」のどちらか適切な方を○で囲みなさい。（ただし、句読点などの記号も字数にふくみます。）

踏まれる場所では、

ので、雑草は上に伸びることを（あきらめてよい あきらめてはいけない）。

問7 空らん 7 8 に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 7 全体的な 8 部分的な
イ. 7 絶対的な 8 相対的な
ウ. 7 積極的な 8 消極的な
エ. 7 長期的な 8 短期的な

三 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

七海^{ななみ}は小学五年生。クラスメイトの結衣^{ゆい}が同じクラスの茜^{あかね}のグループからいじめを受けているのではないかと感じはじめている。そんなある日、七海と結衣は、ふとしたことからそれぞれが心を開いていないことをお互いに非難し合い、けんか別れした。その翌日、七海は学校で結衣がいじめられていることを帆乃香^{ほのか}から聞かされる。

教科書にそんな落書きをされていたなんて、知らなかった。

「七海は結衣ちゃんから、なにも聞いていないの？」

帆乃香がわたしの目をじっと見ている。

ここで二人に話して聞いてもらえたら、どんなにすっきりするだろう。

みんながわたしを責めていないことはわかっていたけど、思わず目をそらし、下を向いた。

だって、聞いていないというより、聞いてあげなかったんだから。

結衣ちゃんがそんなにつらい立場にいたのに、昨日わたしはなにも聞いてあげないで、さらに傷つけてしまった。

「いっしょに死んでくれる？」

結衣ちゃんの言葉が、また頭の中を通りすぎた。

結衣ちゃんが休んだ原因は、茜ちゃんたちのいじめより、わたしの方が大きいかもしれない。

でも昨日のことをみんなに話す気はなかった。これはわたしと結衣ちゃんの問題だから、簡単にみんなに相談なんてできない。

放課後、一人で校門を出る。朝は結衣ちゃんの家に行つてあやまろうと思つていたのに、いまは行く勇気がない。

「商店街を出て、足元の石をポーンとつけた。と同時に、うしろから頭をこつんとたたかれた。

痛つ、とうしろを振り向くと、お姉ちゃんがニタニタしながら、

「なにポケツと歩いてるの。彼氏かれしさんのことでも考えていたのかな、ナ・ナ・ミ、チャン。」

「そんなじゃないよ。」

「なやみごと相談、引き受けようか？ カバンを置いておいで。ドーナツ食べに行こう。」

① お姉ちゃんの顔を見たら、それだけで少し心が軽くなった。

玄関げんかんを開けて、かばんを放り投ほうげるように置く。

「ママ、お姉ちゃんとドーナツ食べに行つてくる。」

ママの返事を待たずに、外に飛び出す。

ドーナツショップで昨日の結衣ちゃんとの話を、お姉ちゃんに聞いてもらった。

さつそくお姉ちゃんから、ズバリ言われた一言。

「七海と結衣ちゃんは、似た者同士なんだね。」

わたしと結衣ちゃんが似た者同士？ そんなことありえない。

「ちがうよ、わたしと結衣ちゃんは、反対の性格だよ。結衣ちゃんは、お姉ちゃんに似ていると思う。行動的で、強くて、

一人でも生きていけるタイプだもん。男っぽいけど、そこが魅力的みりよくてきだよ。それに美人だし。」

お姉ちゃんはふつと吹き出して、

「七海、全然ちがうよ。大体、わたしは行動的じゃないし、弱いし、一人でなんて生きていけないタイプ。努力して、なる

べくその欠点を補おうとしているだけ。でも、七海から見ると強そうに見えるということは、努力はむだじゃなかったとい

うことだから、それはちよつとうれしいかな。」

そういえば、いつかおばあちゃんも同じことを言っていた。

でもやつぱり、お姉ちゃんが弱い人だなんて信じられない。

「昨日の話はともかく、その前からいろいろあったんじゃないの？」

「うん、あのね……。」

わたしはお姉ちゃんに、このまえからの結衣ちゃんとのことや、結衣ちゃんがグループで外されていること、学校を休んだこと、今日の学校での出来事などを話した。

「七海、がんばったじゃん。でも、いまの話を聞いていると、確かに結衣ちゃんと昔のわたしは、似ているかもしれない。わたしも結衣ちゃんみたいに不器用な人だから、小学生のころは近寄りがたい人だったと思う。」

「お姉ちゃんが？ 信じられない。」

だって、いまのお姉ちゃんは女の友だちはもちろん、男の友だちだってたくさんいるのに。

「弱い自分を見せたくなくて、それにもし友だちが自分を受け入れてくれなかったらと思うと、なかなか自分の心を開いていけなかったんだ。受け入れられなくて自分が傷つくなら、浅くつき合って、一人でもだいじょうぶな自分にすればいいって、強がってた。」

アイスコーヒーの氷を、ストローでザリザリいわせながら、わたしをじっと見つめるお姉ちゃん。

「七海、あんたはどうなのよ。」

「どうって？」

「結衣ちゃんに言われたこと。」

結衣ちゃんのあの日の言葉が、耳の奥おくでゆれている。

七海ちゃんはあたしに、心の中を見せてくれたの？

確かにわたしは結衣ちゃんに、心の中を見せてはいないけど。

「だって、心の中を見せるほど、結衣ちゃんと親しくないもん。結衣ちゃんと親友になったら、なんでも聞けるけど、まだ親友じゃないのに、心の中まで踏みこめないよ。」

「じゃあ聞くけど、親友ってなに？」

それは昨日わたしも結衣ちゃんに聞いたけど、わたし自身もわからない。

「親友って……親友って、なんでも話せる親しい友だちのことでしょ。」

うん、うん、うんと、うなずいているお姉ちゃん。

そんなことくらい、わたしだって知っている。

「でもさあ、どうしたら親友になれるの？」

「どうしたら親友になれると思う？ いつから親友？ どこからが親友？」

お姉ちゃんはわたしに聞くと、テーブルの上にある二枚の紙ナプキンをビリビリと破り始めた。

「七海、でこぼこってわかるよね？」

なによ、突然^{とつぜん}。

「そのくらいわかるよ。」

どうして、でこぼこが出てくるのよ。紙ナプキンを破ってるし。ときどきお姉ちゃんは、意味不明な行動をとるんだから。

「じゃあ、でこぼこって、漢字で書ける？」

「えっ、漢字なんてないでしょう。」

おどろくわたしをニヤニヤしながら見て、紙ナプキンを破る手を止めた。

「はい、これがでこぼこの漢字。」

紙ナプキンの一枚は凸の形に、もう一枚は凹の形に切つてある。

「えっ？ 見たことあるけど、これ漢字なの？」

お姉ちゃんは胸を張って、

「そう、凸凹で『でこぼこ』『凹凸で』おうとつ。辞書にも載^のっている立派な漢字です。」

と、ドヤ顔でわたしを見つめる。

「凸と凹が漢字だということは置いて、七海は結衣ちゃんと仲直りをして、本当の親友になりたいと思ってるの？」

③ 「凸凹を置いておくのかい。」ってつつこみたかったけど、お姉ちゃんの真剣な目に、わたしも真剣な目で答えた。

「うん、本気で思ってる。」

お姉ちゃんは立ち上がり店内を見回したあと、二人で座すわっている大学生くらいの男の人の席に向かった。なにを話しているのか、初めは不思議そうな顔の二人がすぐ笑顔えがおになって、うなずいている。

お姉ちゃんも笑いながら、軽く頭を下げるのもどってきて、何事もなかったかのようにいすに座った。

「あの人たち、お姉ちゃんのお友だち？」

「いや、全然知らない人だよ。」

④ と、シラツと答える。

マジ？ 知らない人にいきなり話しかけるか、ふつう。

わけがわからないわたしをよそに、コホンと一つ、わざとらしいせきをする。

「ここに凹があります。そして凸はさっきの知らない男の人の席に置かせてもらいました。」
⑤ 七海、結衣ちゃんのこと本気なら、なにも聞かずにこの凹にあの凸をくつつけて、きれいな四角を作りなさい。」

「えっ、あそこに行つて、凸のナプキンをもらつてくるってこと？」

顔は笑っているが、ふざけているとは思えないし、いまはなにを聞いても答えてくれないだろう。

知らない男の人と話すなんて、初めての経験だし、はずかしいし、なんて言ったらいいのかわからない。

どうしよう……。

もう一度お姉ちゃんの顔を見た。

——七海は結衣ちゃんと仲直りをして本当の親友になりたいと思う？ 結衣ちゃんのこと本気なら……。

⑥ さっきの言葉が頭の中に響ひびいた。

本気だもん。そうだ、そのためにはなんでもするよ。

自分に言い聞かせると、覚悟を決めて立ち上がった。

お姉ちゃんが話した知らない男の人たちの席に近づくと、男の人たちがわたしを見ている。

「あの……。」

思うように声が出ない。

「どうしたの？」

メガネをかけた男の人に聞かれた。

「こんな形をした紙をもらって来いって。」

精一杯の声を出して、手で凸の形を作った。

「はい、これね。なんかのゲーム？ 罰ゲームとか？」

もう一人の人が凸のナプキンを手に取り、ニコツとほほえんだ。

わたしは完全にパニックって、

「あの、友だちと仲直りをして親友になりたいので、もらいに来ました。えっと、ありがとうございます。」
直角に折り曲げた体から、さっきまで出なかった大きな声が店内に響いた。

ポカーンとしている男の人たちから逃げないように、急ぎ足でお姉ちゃんの元にもどった。

「あんた、なにあの説明。わけわからない。」

大笑いのお姉ちゃん。あのね、わけがわからないのは、こっちだよ。超はずかしかったんだから。

「ちゃんと持って来たよ。これをくつつければいいでしょう。」

お姉ちゃんの暗示にかかったように、ナプキンを取りに行っただけど、落ち着いて考えたからおかしい。

結衣ちゃんと親友になることと、凸と凹のナプキンをくつつけることと、どういう関係があるんだろう。

やっぱり、お姉ちゃんのすることは意味不明だ。

でも、とりあえずくつつけてみるか。

「えっ？ あれっ？ 全然合わない。」

「だから言っているでしょう。二つを合わせて、きれいな一つの四角にしてごらんよ。」

少し考えて、わたしは二つの紙ナプキンをよく見ながら、ちぎり始めた。

お姉ちゃんがテーブルにひじをつけて、両手でほおを包んで、わたしの手元を見つめている。

「少しすきまができていくけど、こんなのでもいいのかな。」

二つの紙ナプキンは、ほぼ一つの四角になった。

お姉ちゃんは四角い紙ナプキンを、きれいにのばしながら、

「よくできました。」

と言って、わたしの頭をなでる。

「いま七海がしたことの中に、全部答えがあるんだよ。」

「どういふこと？ ますますわからないよ。」

頭の中には「？」しか存在しない。

「凹の七海と凸の結衣ちゃんが、ぴったりの四角になるためには、はなれていたらなれません。まず、勇気を出して近づくと。」

あつ、知らない男の人たちのところに、勇気を出してもらいに行ったこと？

「さて、近づいたら七海ちゃんは結衣ちゃんの形に合わせて、結衣ちゃんは七海ちゃんの形に合わせて、紙ナプキンをちぎりました。ちぎった部分は、はずかしさかな？ 遠慮かな？ 相手のきらいな部分かな？ いろんなものがあるかもね。」

それはなんとなくわかる気がする。

「でも、ぴったりとは重ならないよ、この紙ナプキン。」

「そうだね、どんなに親しい友だちでも、たとえ親子でも、わからない部分はあるよね。このすきまがその部分かな。それ

をうめようと、いま七海が一生懸命努力したよね。それが大切。」

うん、むずかしい。

わかり合えない部分を、おたがいがわかるうと努力するってこと？

「でも、相手を傷つけたたり、けんかになったりすることもあるよね？」

「それはね、結果的には、けんかじゃないの。深く知り合うためには、通らなきゃならない道もあるってこと。」

⑦ わたしを見つめるお姉ちゃんの目が、いつになく厳しい。
そうは言うけど、結衣ちゃんとわたしは全く反対の性格だから、深く知りあう前に、けんか別れするかもしれない。それに、結衣ちゃんのことを気になるけど、深く知ろうとすると傷つけるかもしれない。だって、わからない部分が多いんだもん。

うじうじ考えていると、お姉ちゃんが、

「ねえ、川に行くときあ、石がいっぱいあるでしょう。」

と、全く関係のないことを言い出した。

「川の石って、丸っぽいのが多いけど、あれって最初から丸いわけじゃないんだよね。上流から流れてくる間に、いろんな石にぶつかって、だんだんに角がけずれてくるんだよね。」

お姉ちゃんが紙ナプキンでツルを折りながら、わたしを見る。

「友だちって、おたがいちがう形の石なんだと思う。相手を傷つけたたり、傷つけられたりしながら、うまく合うようになっていくんじゃないかな。」

傷ついたり、傷つけられたりか。

「それで両方とも丸くなるってこと？」

お姉ちゃんは、だまってツルを折り続ける。

もし両方とも丸くならなかったら、親友にはなれないのかな。

片方だけ丸くなって、もう一つの石は角ばったままかもしれないし、ぶつからないで、うまく流れていく石もあるかもしれない。

「じゃあ、ぶつかり合えば、親友になれるっていうこと？」

お姉ちゃんは、またもやニタリと笑って、スマホに目を向け立ち上がる。

「さて、その先は自分で考えてみな。いい、石が二つ。どちらも四角。さあ、どうする？　そして、どうしたら親友になれるかな？　その答えがわたしを納得なっとくさせられたら、アイスをダブルでのごちそうあげる。」

「マジ？」

お姉ちゃんはすくつと立ち上がると、

「かんとんには納得しないからね。よし、帰るぞ。」

トレイを持って出口に向かった。

(今井福子『友だちをやめた二人』より)

問1 — 線部① 「お姉ちゃんの顔を見たら、それだけで少し心が軽くなった」とありますが、七海はお姉ちゃんをどのよ

うな存在として見ていますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 自分と同様に行動的ではないが、努力家であるという面では尊敬できる存在。

イ. 自分とは反対に行動的で強くて自立している、とても頼れる存在。

ウ. 不器用で人見知りをする部分が結衣と似ていて、親しみを覚える存在。

エ. 心を開かず一人で強がっている姿が自分と似ていて、いっしょにしていると安心できる存在。

問2 — 線部② 「わたしをじっと見つめるお姉ちゃん」とありますが、ここの「お姉ちゃん」の説明として最も適切なも

のを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 自分の言おうとしていることを七海が理解できていないことが分かり、少しいら立っている。

イ. 自分と結衣に共通する内面の弱さを、上からの視線で指摘している七海を非難しようとしている。

ウ. 結衣や自分は不器用であるが、七海は上手に心が開けていることをそれとなく指摘しようとしている。

エ. 七海が他人に心を開くことができているかどうかを、七海自身に考えさせようとしている。

問3 — 線部③ 『凸凹でこぼこを置いておくのかい。』ってつつこみたかった」とありますが、このように「つつこみた」くな

ったのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 易しい内容の話から突然難しい内容の話に変えたことにとまどいとおかしさを感じたから。

イ. 妹の自分が興味を持っている話題と知りながら、その話題をわざとそらしたことに意地の悪さと不真面目ふまじめさを感じたから。

ウ. それまで得意げに話していたこととまったく関係のない話を急に始めたことにとまどいとおかしさを感じたから。

エ. まったく関係のない話を始めたので、それまでは大切な話をしているふりをしていたのだと分かり、意地の悪さと不真面目さを感じたから。

問4 — 線部④ 「シラッと」とありますが、これはどのような様子を表現していますか。その説明として最も適切なものを

を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 何ともない様子

イ. ふざけた様子

ウ. 面白そうな様子

エ. 自信のない様子

問5 — 線部⑤ 「七海、結衣ちゃんのこと本気なら、なにも聞かずにこの凹ぼくにあの凸こぼをくつつけて、きれいな四角を作り

なさい」とありますが、凹凸ぼくこぼの紙ナプキンを合わせる経験を通してお姉ちゃんは何を教えたかったのですか。八十字以内で説明しなさい。(ただし、句読点などの記号も字数にふくみます。)

問6 — 線部⑥ 「さっきの言葉が頭の中に響いた」とありますが、ここでの七海の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. お姉ちゃんの先ほどの質問の意図が初めて分かり、先ほど何も考えずに返事をしてしまったことを後悔している。
- イ. 知らない人と話すことに対しては抵抗を感じるが、お姉ちゃんの期待にこたえるためになんげぼううとしている。
- ウ. 結衣と本気で親友になろうと決心したことの重圧が、今さらながら心にのしかかっている。
- エ. 知らない人に話しかける抵抗感を、結衣と本当の親友になりたいという気持ちの強さが上回ろうとしている。

問7 — 線部⑦ 「わたしを見つめるお姉ちゃんの目が、いつになく厳しい」とありますが、この時のお姉ちゃんのお気持ちの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 「大変なことだけどもがんばるのよ」という、妹をほげます気持ち。
- イ. 「けんかに負けてもだいじょうぶだよ」という、妹を気づかう気持ち。
- ウ. 「そんなこともわからないの？」という、妹に対していらつく気持ち。
- エ. 「私の意見に逆らうなんて!」という、妹に対するおどろきの気持ち。

(お わ り)

